

ところかわ
常呂川圏域河川整備計画（変更）

平成 30 年 5 月
（令和 3 年 3 月部分改定）

北 海 道

策定及び改定経過

区 分	年 月	備 考
策 定	平成 30 年 5 月	
第 1 回 部分改定	令和 3 年 3 月	今 回 改 定

常呂川圏域 河川整備計画

目 次

第 1 章	対象圏域と圏域内河川の現状	1
第 1 節	対象圏域の概要	1
第 2 節	圏域内河川の現状	9
第 2 章	河川整備の目標に関する事項	34
第 1 節	計画対象区間及び優先整備区間	34
第 2 節	計画対象期間	36
第 3 節	洪水等による災害の発生の防止又は軽減に関する事項	36
第 4 節	河川の適正な利用及び流水の正常な機能の維持 並びに河川環境の整備と保全に関する事項	41
第 3 章	河川整備の実施に関する事項	46
第 1 節	河川工事の目的、種類及び施行の場所並びに当該河川工事 の施行により設置される河川管理施設の機能の概要	46
第 2 節	河川維持の目的、種類及び施行の場所	53
第 4 章	河川情報の提供、地域や関係機関との連携等に関する事項	55
第 1 節	河川に関わる調査等の推進	55
第 2 節	河川情報の提供に関する事項	55
第 3 節	地域や関係機関との連携等に関する事項	55

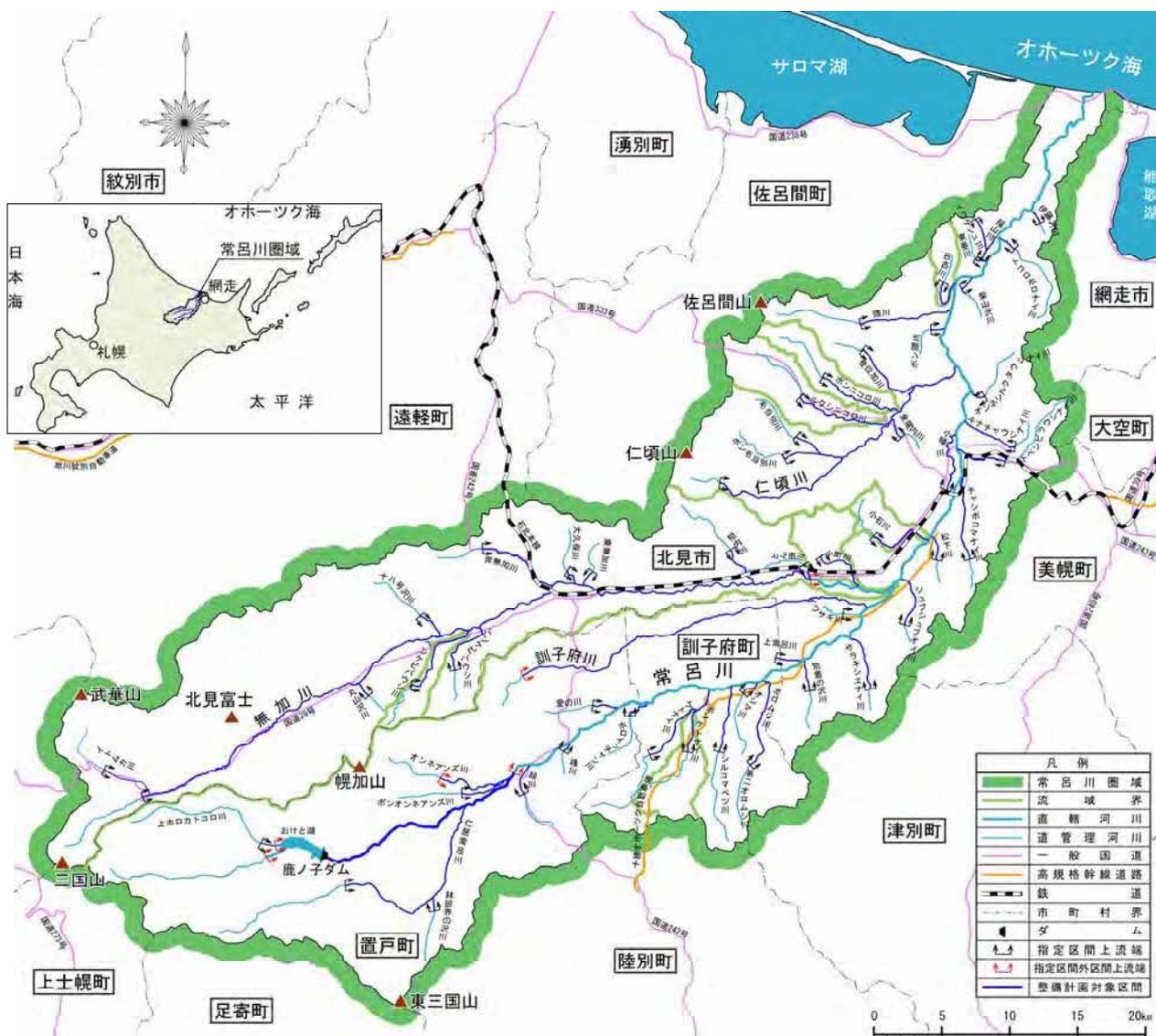
常呂川圏域河川整備計画附図

第1章 対象圏域と圏域内河川の現状

第1節 対象圏域の概要

常呂川は、その源を北海道中央部の大雪山系三国山（標高 1,541.4m）に発し、訓子府川、無加川、仁頃川等の支川を合流しながら北東方向に流下してオホーツク海に注ぐ、流域面積 1,930km²、幹川流路延長 120km の一級河川である。

本整備計画の常呂川圏域は、常呂川及び支川の北海道知事が管理する区間（北海道知事管理区間）を対象としており、その流域は、置戸町、訓子府町、北見市の 1市2町で構成されている



(1) 圏域の自然環境

1) 地形・地質

圏域の地形は、上下流ともほぼ同じ流域幅の細長い形状をしており、上流部は、大雪山系の東端にあたり標高 1,000m 以上の急峻な山岳地形となっている。中流部は、小起伏山地、丘陵地及び数段の段丘地形に囲まれた北見盆地を形成している。また、下流部は、標高 300m 程度の山地に囲まれた狭い谷底を経て常呂低地が広がっている。流域の土地利用は、山地等が約 78%、農地が約 20%、宅地等の市街地が約 2%となっており、流域内は森林資源等に恵まれている。

圏域の地質は、常呂川の置戸町北東部、無加川の北見市留辺蘂市街地付近より上流部では、日高帯ひだかに含まれる中生代の粘板岩、砂岩等を基盤として、これらを新第三紀の凝灰岩、安山岩等の火山性岩石が広く覆っている。下流部は、常呂帯に属する中生代の輝緑岩類きりよくがんや、新第三紀層の砂岩、泥岩等が広く分布するほか、古第三紀層の礫岩等が見られる。また、河川及びその近傍には、砂礫や粘土等で構成される段丘堆積物や沖積層等が分布している。

2) 気 候

圏域の気候は、オホーツク海型の気候区分に属し、オホーツク海高気圧の影響を強く受け、河口部周辺は海洋性の気候で、その他の大部分は内陸性の気候となっている。

年平均気温は 7℃程度、年最高気温は 33℃程度、年最低気温は-23℃程度と寒暖の差が激しい。また、内陸の北見盆地では、フェーン現象により、記録的な高温が観測されることがある。

年降水量は 780mm 程度と道内の中でも比較的少ない地域であり、特に冬期の降水量が少ない。

また、1月中旬から4月上旬頃までの河口沿岸には、流氷が接岸し、オホーツク海は流氷に覆われる。



<オホーツク海沿岸の流氷>

3) 植物・動物

圏域の植生は、上流域ではエゾマツ、トドマツ等の針葉樹林が大半を占めており、中下流域の低山帯ではミズナラ、エゾイタヤ等の広葉樹林が広がっている。また、源流部の武華山^{むかやま}、三国山^{みくにやま}等の高山帯では高山植物が見られる。流域内の貴重な植物群落として、北海道指定天然記念物の「温根湯エゾムラサキツツジ群落」がある。河道内は、ヨシ群落やヤナギ低木林からなる河畔林が大部分である。

源流部は大雪山系に位置することから、動物の生息環境に恵まれ、哺乳類としてエゾナキウサギ、エゾクロテン、エゾモモンガ等の重要種のほか、ヒグマ、エゾシカ等が生息している。鳥類は種類が豊富で、河口部では天然記念物のオジロワシ、オオワシが生息している。



<温根湯エゾムラサキツツジ群落>

(2) 圏域の社会環境

1) 人口

圏域の人口は、昭和 60 年まで増加傾向にあったが、その後横ばい状態となった後減少傾向に転じ、現在では約 13 万人（平成 27 年）である。また、その大半が常呂川及び支川の沿川に集中している。圏域の中心都市である北見市は、人口約 12 万人でオホーツク総合振興局管内の産業、経済、文化の中心として、また、近隣の農林業の集産地として発展している。

2) 産業

圏域の産業は、畑作、酪農を中心とした農業や林業、農林産品の一次加工を主とした工業、観光等が発展している。

一次産業に関しては、圏域の中心をなす北見市、訓子府町は畑作が盛んで、小麦、馬鈴しょ、てん菜の畑作 3 品に加え、全国一の生産量を誇るたまねぎの産地となっている。河口沿岸では、ホタテ、サケ等を中心とした沿岸漁業が行われている。また、置戸町では林業や酪農が盛んである。

工業は、地域の豊富で良質な農水産資源の加工が主力産業であり、高付加価値化に対する取り組みが大きな成果を収めている。また、豊富な森林資源を背景に、木材・木製品の製造も盛んである。

観光面では、北見市の「北見フラワーパラダイス」、「ワッカ原生花園」、置戸町の「鹿ノ子ダム」等、自然を楽しむことのできる場所が多い。



<北見フラワーパラダイス>



<ワッカ原生花園>



<鹿ノ子ダム>

3) 風土・文化

圏域の遺跡等から、明治以前は先住民族が川沿いで漁労、狩猟、採集生活を営んでいたことがわかっている。

その後明治 30 年、北方の防備と開拓を担った屯田兵や高知県で組織された北光社移民団が北見市に入植し、開拓が始まった。さらに明治 43 年、池田～北見間に池北線が開通し、屯田兵ゆかりの人々の移住や開拓民の増加が進み、主要産業が漁業から農林業へと変わっていった。

このように、圏域の風土、文化は、屯田兵や北光社に代表される開拓者の影響が大きく反映されている。

教育面や文化面では北見市内にある 2 つの大学や、北見芸術文化ホール、^{ほくもう}北網圏北見文化センター等を通して地域に根ざした芸術、文化が発達している。

圏域の史跡文化財は、北見市に国指定史跡の「常呂遺跡」、北見市指定の「屯田兵屋」「屯田兵人形」「ピアソン記念館」「ハッカ記念館」、北海道指定天然記念物の「温根湯エゾムラサキツツジ群落」等がある。



<常呂遺跡>



<屯田兵人形>



<ピアソン記念館>



<ハッカ記念館>

4) 土地利用

圏域は大半が山地であり、平地は常呂川の河口部と内陸部、無加川^{むかがわ}の川沿いに見られる。

常呂川の肥沃な土壌と豊かな水資源を背景に、畑作が広がっており、山地部の林産資源にも恵まれた地域である。

常呂川、無加川沿川には市街地が広がり、特に無加川合流点に位置する北見市は市街地化が著しく、オホーツク総合振興局管内の中心都市となっている。

土地利用状況は、山林、畑地としての利用割合が高いが、減反政策による水田面積の減少や、土地開発により原野が減少している。また、核家族化が進むに伴い宅地面積が増加している。

5) 交通

圏域の主要な交通網は鉄道と道路であり、鉄道は旭川市から網走市に至る「JR石北本線」が北見市^{あさひかわ}を通過している。

また、幹線道路は旭川市から網走市に至る国道39号、網走市からオホーツク海岸線沿いに稚内市^{わっかない}に至る国道238号、網走市から帯広市^{おびひろ}に至る国道242号、旭川市から北見峠を經由して北見市に至る国道333号、帯広市から網走市に至る北海道横断自動車道（一部供用開始）がそれぞれ圏域を通過している。

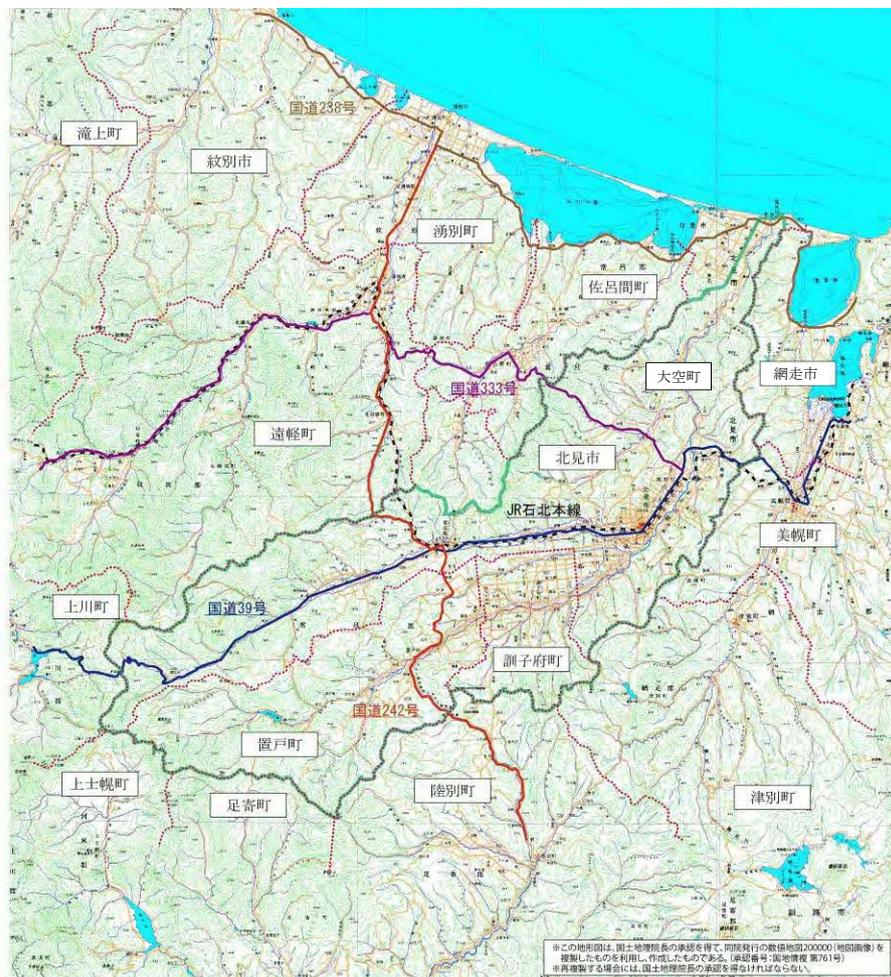


表 1-1 北海道知事管理河川一覧

河川名				北海道知事 管理区間 延長(km)	河川名				北海道知事 管理区間 延長(km)	
本 川	1 次	2 次	3 次		本 川	1 次	2 次	3 次		
				常呂川	16.3				・ ・ 大久保川	1.2
				・ 伊藤沢川	1.0				・ ・ 奔無加川	7.3
				・ ・ イワケシュ川	0.4				・ ・ パンケビバウシ川	8.0
				・ 福山川	2.3				・ ・ ペンケビバウシ川	6.5
				・ トコロホロナイ川	1.5				・ ・ 十八号沢川	2.2
				・ 東亜川	0.8				・ ・ 丸山沢川	0.9
				・ 柴山沢川	1.0				・ ・ イトムカ川	3.3
				・ 日吉川	3.0				・ 訓子府川	30.2
				・ 隈川	7.5				・ イワサキ川	0.6
				・ ポン隈川	0.6				・ サラキシエナイ川	6.0
				・ 仁頃川	23.6				・ 別着の沢川	2.3
				・ ・ 登位加川	5.2				・ 上常呂川	1.3
				・ ・ ポンニコロ川	6.1				・ オロムシ川	8.5
				・ ・ 金尾内川	1.5				・ ・ 第二オロムシ川	0.1
				・ ・ ルクシニコロ川	5.6				・ オシマ川	1.5
				・ ・ 毛当別川	3.9				・ シルコマベツ川	4.5
				・ ・ ・ ポン毛当別川	2.6				・ ケトナイ川	8.0
				・ オンネシルクタウシナイ川	1.0				・ ・ ポンケトナイ川	3.5
				・ キナチャウシナイ川	5.0				・ ホロイツチャン川	2.0
				・ 小幡川	5.5				・ 愛の川	2.2
				・ トベンピラウシナイ川	5.5				・ 種川	0.5
				・ チャシポコマナイ川	10.0				・ 緑川	3.6
				・ 松下川	2.8				・ オンネアンズ川	6.5
				・ 小石川	4.8				・ ・ ポンオンネアンズ川	1.1
				・ シュブシュブナイ川	4.0				・ 仁居常呂川	16.2
				・ 無加川	59.8				・ ・ 林班界の沢川	0.6
				・ ・ 小町川	5.8				・ 上ホロカトコロ川	1.5
				・ ・ とん田川	1.6					
				・ ・ 相内川	1.7					
				・ ・ 東無加川	2.0				計 57 河川	322.9

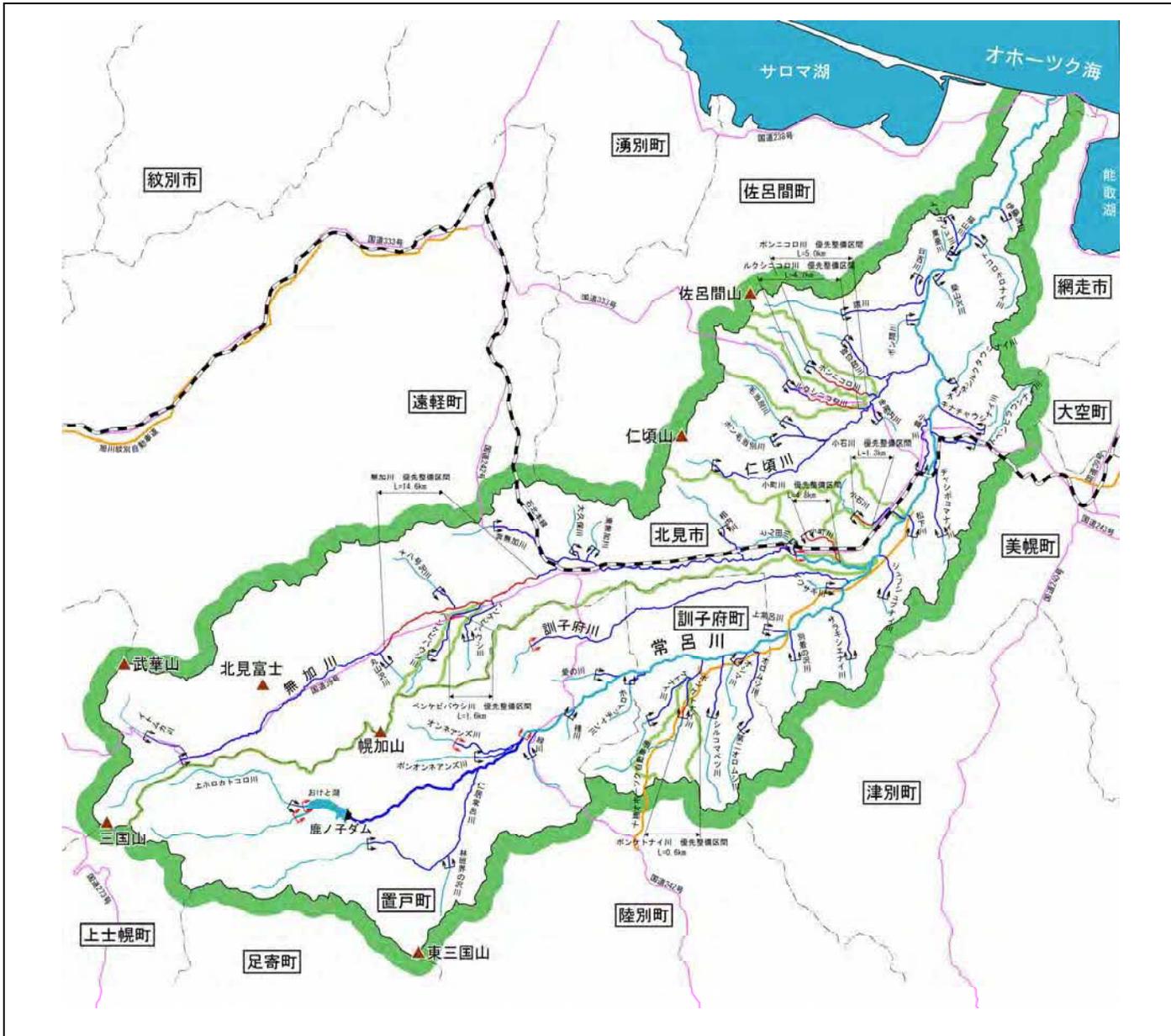


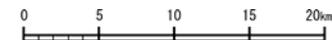
図 1-1 計画対象圏域図

位置図



凡 例	
	常 呂 川 圏 域
	流 域 界
	直 轄 河 川
	道 管 理 河 川
	一 般 国 道
	高 規 格 幹 線 道 路
	鉄 道
	市 町 村 界
	ダ ム
	指 定 区 間 上 流 端
	指 定 区 間 外 区 間 上 流 端
	整 備 計 画 対 象 区 間
	優 先 整 備 区 間

S=1:500000



第 2 節 圏域内河川の現状

圏域の北海道知事が管理する河川は 57 河川（管理区間延長 321km）である。このうち、過去の災害発生状況、現況河川の流下能力、川沿いの土地利用状況等から、優先的に河川整備を実施する必要がある河川は、日吉川、ポンニコロ川、ルクシニコロ川、小石川、無加川、小町川、ペンケビバウシ川、ケトナイ川、ポンケトナイ川の 9 河川である。

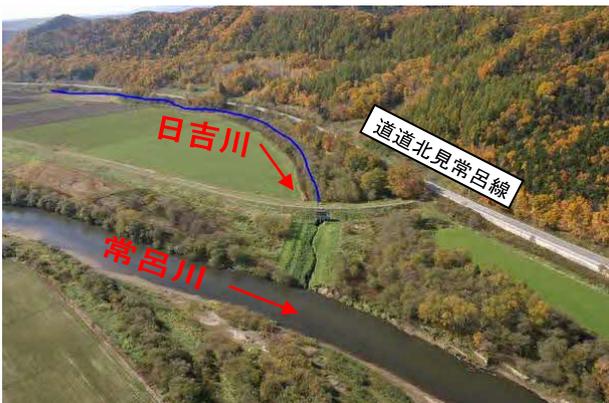
各河川の現状は、以下のとおりである。

（1）河川の概要

1) 日吉川

日吉川は、オホーツク地域中央部付近に位置する北見市と佐呂間町との境界をなしているイワケシ山（標高 425.3m）の連峰にその源を発し、ポン日吉川を合わせて南流し、日吉橋を流下後、道道北見常呂線に沿いながら北流したのち、常呂川に合流する流域面積 7.6km²、流路延長 8.3km の一級河川である。全流域が北見市に含まれている。

流域の土地利用は、全体の約 97% が山林で上流域の大部分を占め、下流域では、日吉市街地が隣接し、そこから常呂川合流点にかけて広がる平地は耕作地として利用されている。日吉川の名の由来は、不明である。



< 日吉川 常呂川合流点付近 >



< 日吉川 日吉市街地付近 >

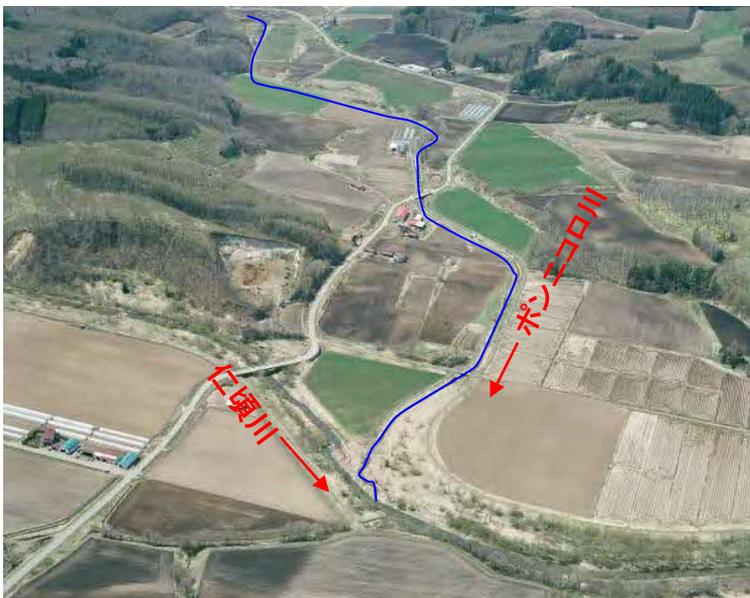
2) ポンニコロ川

ポンニコロ川は、オホーツク地域北部付近に位置する北見市と佐呂間町の境界をなす佐呂間山（標高 515.3m）と仁頃山（標高 829.2m）を結ぶ分水嶺付近にその源を発し、南流し、常呂川支流仁頃川に合流する流域面積 21.7km²、幹川流路延長 12.8km の一級河川である。全流域が北見市に含まれている。

流域の土地利用は、全体の約 84% が山地で占め、平野部は主に農地や宅地に利用されている。

ポンニコロ川の名の由来は、アイヌ語の「ポン（支流）」と「ニコロ（木・を持つ）」の 2 つの言語を合わせたもの※¹と解釈されている。

※1 山田秀三(1971)北海道の川の名, 電通北海道支社



<ポンニコロ川 仁頃川合流点付近>



<ポンニコロ川 豊橋付近>

3) ルクシニコロ川

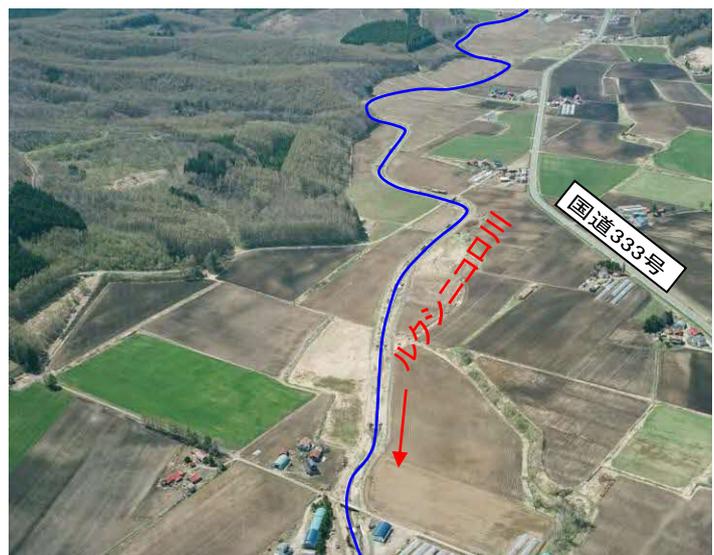
ルクシニコロ川は、オホーツク地域北部付近に位置する北見市と佐呂間町の境界をなす佐呂間山（標高 515.3m）と仁頃山（標高 829.2m）を結ぶ分水嶺付近にその源を発し、南流し、常呂川支流仁頃川に合流する流域面積 35.7km²、幹川流路延長 14.8km の一級河川である。全流域が北見市に含まれている。

流域の土地利用状況は、全体の約 93%を山地が占め、平野部は主に農地や宅地に利用されている。

ルクシニコロ川の名の由来は、不明である。



<ルクシニコロ川 仁頃川合流点付近>



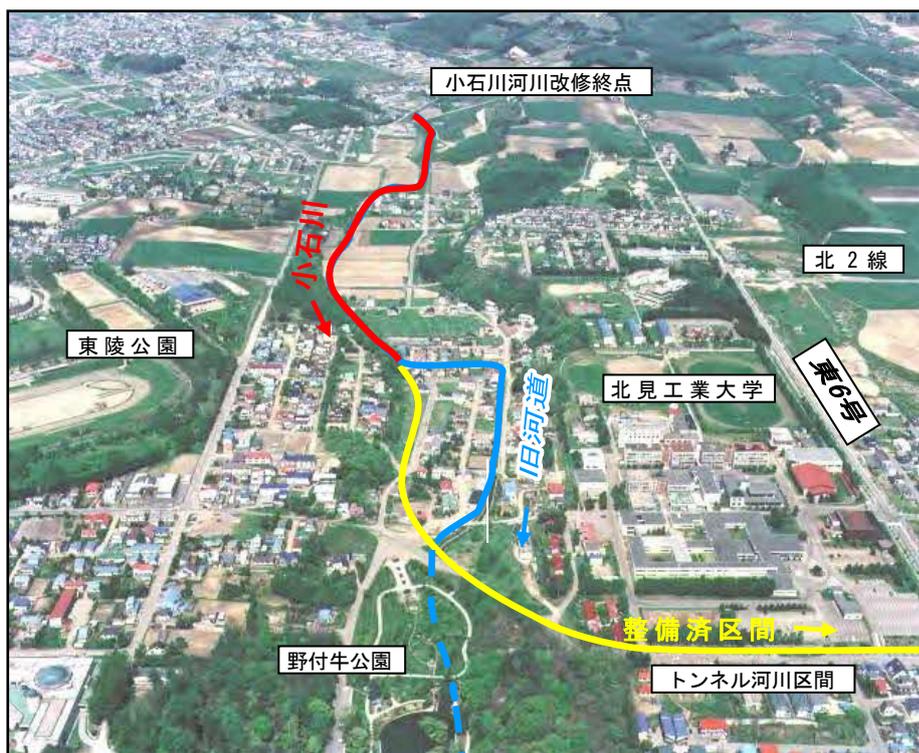
<ルクシニコロ川 光映橋付近>

4) 小石川

小石川は、オホーツク地域中央部付近に位置する北見市北部の標高約 300m の丘陵地に源を発し、南西に 3km 流下した後、向きを南東に変えて、北見市中心市街地の北東部を流下する。野付牛公園の直上流から地下埋設となっていて市街地を直線的に貫流し、常呂川に合流する直前で入馬川と合流して再び地上を流下する流域面積 10.9km²、流路延長 8.0km の一級河川である。

流域の土地利用は、上流域が丘陵地で牧草地や畑地となっており、中流域が平地で畑地や宅地として利用されている。

小石川は、かつては入馬川が本流と位置づけられ、小石川はその支流とされ「カプイサムウリカ川」という名であった。（「北海道蝦夷地名解（永田方正 著）」によると木皮のない橋と解釈している）小石川の流れる沢地は、野付牛公園北側の東陵町と美山町に及ぶ一帯を農地としていた田尾農場にちなみ「田尾の沢」とも呼ばれていた。小石川と命名されたのはかなり後世になってからのことであり、由来は不明である。



< 小石川 中流の状況 >

5) 無加川

無加川は、オホーツク地域南西部に位置する北見市留辺蘂町西部の大雪山系三国山（標高 1541m）に源を発して東に流れ、北見市留辺蘂町滝の湯付近から平地を流下して、北見市中ノ島町で常呂川に合流する流域面積 558.5km²、流路延長 74.6km の一級河川である。

流域の土地利用は、上下流とも流域幅 10 km 程度の細長い形状で、山地が約 89%、平地が約 11% となっており、無加川沿いの平地や緩い段丘部は、主に畑作が営まれている。また、無加川と並行して走る国道 39 号沿いには、温根湯、留辺蘂、相内等の市街地が形成されている。特に常呂川合流部付近では、市街化が著しく、宅地、工業地、郊外型大型店舗等の進出が際立っている。

無加川の名の由来は、「永田地名解」によると、アイヌ語の「ムカ」（氷上を越す）の意で、“この川は温泉があるため、水が凍るのが遅かった。水が凍って、流れが塞がる時に初めて氷上を越えたため”^{※1}と解釈されている。

※1 山田秀三(1971)北海道の川の名，電通北海道支社



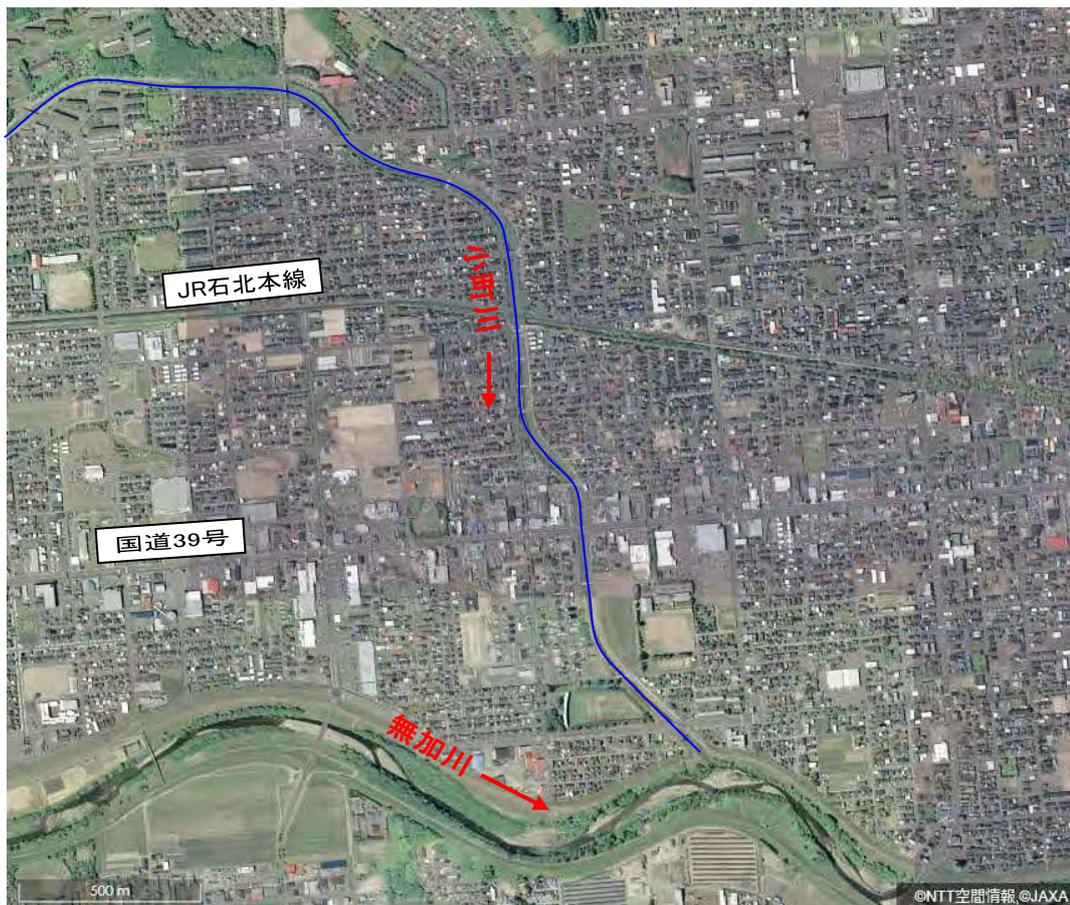
< 無加川 北見市留辺蘂町より上流 >

6) 小町川

小町川は、オホーツク地域中央部付近に位置する北見市北部の標高約300mの丘陵地にその源を発し、大正川が合流して市街地を流下し、無加川に合流する、流域面積19.3km²、流路延長9.1kmの一級河川である。

流域の土地利用状況は、全体の約72%を山地が占め、平野部は主に宅地や畑地に利用されている。特に無加川合流部付近では、宅地利用が多くなっている。

小町川の名の由来は、不明である。



< 小町川 無加川合流点付近 >

7) ペンケビバウシ川

ペンケビバウシ川は、オホーツク地域南西端に位置する置戸町と北見市境界の無名山（標高約 957m）に源を発し、北東方向に流下して、温根湯市街地を經由して無加川に合流する流域面積 11.6km²、流路延長 9.5km の一級河川である。

流域の土地利用は、全体の約 66%が山林で上流域の大部分を占め、中流域は緩やかな斜面を畑地として利用されており、下流域は無加川の沖積平野で、宅地や畑地として利用されている。

ペンケビバウシ川の名の由来は、アイヌ語の「ペンケ（上流側の）」と「ピバウシ（カラス貝・多くいる・川）」の 2 つの言語を合わせたもの※²と解釈されている。

※² 伊藤公平(1998)留辺蘂の地名，留辺蘂郷土研究会



< ペンケビバウシ川 下流の状況 >

8) ケトナイ川・ポンケトナイ川

ケトナイ川は、オホーツク地域南西端に位置する訓子府町の無名山(標高 642m)にその源を発し、北東に流下し、支川ポンケトナイ川が合流し、常呂川に達する、流域面積 61.1km²、流路延長 15.2km の一級河川である。全流域が訓子府町に含まれている。

流域の土地利用状況は、全体の約 70%を山地が占め、平野部は主に農地や宅地に利用されている。流域における基幹産業は一次産業の農業であり、たまねぎ、てん菜等の畑作が行われている。

ケトナイ川の名の由来は、一説によると、アイヌ語のケッ・ナイ(獲皮を乾す張り枠(のある)・川)の意と言われている^{※1}。

※1 山田秀三(1971)北海道の川の名, 電通北海道支社



<ケトナイ川 常呂川合流点付近>